

この電子化された添付文書をよく読んでから使用してください。

体外診断用医薬品 2025年1月作成(第1版)
製造販売認証番号:307AAEZ00005000

第 XI 凝固因子キット

コバス t システム 第 XI 因子

【全般的な注意】

1. 本品は体外診断用であり、それ以外の目的には使用しないでください。
2. 測定結果に基づく臨床診断は、臨床症状やほかの検査結果などと併せて、担当医師が総合的に判断してください。
3. 電子化された添付文書に記載された使用目的及び用法・用量に従って使用してください。記載された使用目的及び用法・用量以外での使用については、測定結果の信頼性を保証しかねます。
4. 構成試薬(第 XI 因子欠乏血漿)はヒト血液由来成分を含みます。HBs 抗原、抗 HIV(HIV-1 及び HIV-2)抗体及び抗 HCV 抗体の陰性が確認されていますが、感染性がないことを完全に保証する試験方法はないため、感染性があるものとして、検体と同様に取り扱ってください。
5. 使用する機器の電子化された添付文書及び取扱説明書をよく読み、記載に従って使用してください。

【形状・構造等(キットの構成)】

コバス t システム 第 XI 因子

R2:第 XI 因子欠乏血漿*

第 XI 因子欠乏ヒト血漿

(R2:ポジション A、B 及び C)

※ヒト血液由来成分を含みます。詳細は【全般的な注意】の項及び【使用上又は取扱い上の注意】の項「1. 取扱い上(危険防止)の注意」を参照してください。

【使用目的】

血漿中の第 XI 凝固因子の測定

【測定原理】

第 XI 因子活性の測定は、希釈した血漿検体に第 XI 因子欠乏血漿(第 XI 因子活性は通常の 1%未満、第 XI 因子以外の凝固因子活性は通常の 50%超)を添加し、活性化部分トロンボプラスチン時間(APTT)試験で測定されます。第 XI 因子欠乏血漿と混合されたキャリブレーション血漿の希釈で得られた検量線を使用して、測定された凝固時間から第 XI 因子活性値を求めます。

【操作上の注意】

1. 測定試料の性質、採取法

測定試料:3.2%クエン酸血漿

測定試料の調製法:

プラスチック製の試験管あるいはシリコン処理したガラス試験管を使用してください。0.11 mol/L クエン酸ナトリウム 1 容と新鮮血 9 容を泡立てないようによく混和してください。

採血管の種類によっては、測定結果に影響を及ぼす場合があります。採血管をそのまま機器にセットして測定する場合は、採血管の製造元の指示に従ってください。

15 分間 2,500 g 又は血小板が 10,000 / μ L 未満になるような条件で遠心してください。

測定試料の安定性:

15~25℃で 4 時間安定

-20℃(±5℃)で 28 日間安定

凍結した検体は使用前にウォーターバスにて 37℃で 5 分以内に溶解してください。溶解した検体は泡立てないように混和してください。融解した凍結血漿は 2 時間以内に測定してください。検体は再凍結しないでください。

2. 妨害物質・妨害薬剤

- (1) 下表に示す物質が本品の測定に与える影響を確認したところ、下表の各濃度までは測定に与える影響は±10%以内でした。脂質、ヘモグロビン、ビリルビンの影響は、Glick に従い確認しました¹⁾。

化合物	濃度
抱合型ビリルビン	15 mg/dL
非抱合型ビリルビン	45 mg/dL
ヘモグロビン	500 mg/dL
イントラリピッド	1,000 mg/dL

- (2) ヘパリンを除いて、一般的な薬物の治療濃度では影響はありませんでした^{2),3)}。
- (3) スレプトキナーゼの線維素溶解作用は、凝固時間を延長し、その結果、第 XI 因子活性を低下させます。検体中の fondaparinux や、argatroban、bivalirudin 又は dabigatran などの直接トロンビン阻害剤や、edoxaban、rivaroxaban 又は apixaban などの第 Xa 因子阻害剤の存在は、第 XI 因子の測定結果に影響を及ぼす可能性があります。
- (4) Oritavancin 濃度 15 mg/L まで測定に与える影響はありません。

3. 特別な洗浄サイクル

特定のテストの組み合わせと一緒に実行する場合は、特別な洗浄ステップの使用が必須です。詳細な指示については、装置取扱説明書およびユーザーアシスタンスで見つかったキャリーオーバー回避リストの最新版を参照。必要に応じて、本試験で結果を報告する前に、特別な洗浄/キャリーオーバー回避サイクルを実施しなければなりません。

4. その他

本試薬はコバス t システム(機器)に適用できます。

【用法・用量(操作方法)】

1. 試薬の調製方法

試薬はそのまま装置にセットしてください。適宜、装置により精製水で自動溶解されます。

2. 試薬の安定性

未使用時:2~8℃で使用期限まで安定

機器上 :8 時間安定(溶解後)

試薬は直立状態で保管してください。

凍結しないでください。

3. 別途必要な器具・器材・試薬

<共通>

- ・コバス t システム(機器)
- ・コバス t システム APTT LS
- ・コバス t システム塩化カルシウム(25 mM)
- ・コバス t システムオーレン緩衝液
- ・精製水又は脱イオン水

<キャリブレーション・コントロール>

- ・コバス t システムグローバルキャリブレーション
- ・コバス t システムコントロール N
- ・コバス t システムコントロール P

又は

- ・コバス t システム UniCal
- ・コバス t システム UniCon N
- ・コバス t システム UniCon P

4. 操作方法

第 XI 因子欠乏血漿を下記のとおり、コバス t システム(機器)に設置してください。

(1) 試薬の設置準備

フロントパネルを開きます。試薬カセットドロワーのインジケータを確認し、点灯していないことを確認します。

(2) 試薬の設置

試薬カセットドロワーに試薬を設置し、ドロワーを閉めます。
その後、フロントパネルを閉めます。

(3) 検体の設置及び測定開始

検体をコバス t システム(機器)所定の方法でセットし、オーダーをかけると第 XI 因子の測定が開始されます。測定はコバス t システム(機器)内のパラメーターにしたがって行われます。

コバス t 711(機器)の場合

- 1) コバス t システムオーレン緩衝液 27 μ L、第 XI 因子欠乏血漿 30 μ L、検体 3 μ L、コバス t システム APTT LS の構成試薬である APTT 試薬 30 μ L を混和し、所定温度で所定時間インキュベーションします。
- 2) 予め加温した塩化カルシウム(25 mmol/L)30 μ L を加え、凝固するまでの時間を測定します。
- 3) 各標準液が凝固するまでの時間から検量線を作成し、検体が凝固するまでの時間から第 XI 凝固因子の活性を求めます。

(4) 結果の表示

測定が終了次第、リアルタイムにディスプレイに結果が表示されます。

注意)操作方法の詳細については、コバス t システム(機器)の取扱説明書を参照してください。

5. 検量線の作成法

3.別途必要な器具・器材・試薬 に記載のキャリブレーションを機器にセットしてください。検量線は機器によって自動的に作成されます。検量線は、ロット番号の変更がない限り、同一のものを使用できます。詳しくは、コバス t システム(機器)の取扱説明書を参照してください。

6. 精度管理

精度管理には、3. 別途必要な器具・器材・試薬 に記載の精度管理試料をご使用ください。

精度管理は精度管理試料の測定値が許容範囲内にあることを確認してから検体測定を行ってください。

【測定結果の判定法】

測定結果の判定及び参考基準範囲

参考基準範囲:73.4～149%

これらの値は、合計 200 個のヒト血漿サンプルから得られた結果の 2.5 パーセンタイルおよび 97.5 パーセンタイルに相当します。

基準範囲は、測定試料、測定条件、基準個体などにより異なる場合がありますので、各施設で臨床医と相談の上、設定してください。

【性能】

1. 性能

【用法・用量(操作方法)】に記載に従い、感度・正確性・同時再現性の各試験を行った場合、下記の規格値に適合します。

(1) 感度試験

- 1) 既知活性の標準液 1(17.7～26.5%)を試料として測定するとき、既知活性の±20%以内です。
- 2) 既知活性の標準液 2(70.7～106%)を試料として測定するとき、既知活性の±20%以内です。

(2) 正確性試験

既知活性の管理用試料(<45.0%、60.0～90.0%及び 97.5～120%)を測定するとき、既知活性の±20%以内です。

(3) 同時再現性試験

同一管理用試料(<45.0%及び 97.5～120%)を 3 回同時に測定するとき、測定値の CV はそれぞれ 15%以下です。

(4) 測定範囲

1.00～150%

(5) 測定下限値

LoQ: 1.00 %

CLSI ガイドライン EP17-A2⁴⁾に従って、定量限界(LoQ)を算出しました。

2. 相関性試験成績⁵⁾

- (1) 本品と既存製品 1 との相関性を検討したところ、50 例の血漿検体において良好な相関性が得られました。

相関係数 $r=0.990$

回帰式 $y=1.01x-1.42$

y:本品 x:既存製品 1

- (2) 本品と既存製品 2 との相関性を検討したところ、59 例の血漿検体において良好な相関性が得られました。

相関係数 $r=0.981$

回帰式 $y=1.02x+2.22$

y:本品 x:既存製品 2

3. 校正用基準物質

WHO/NIBSC

【使用上又は取扱い上の注意】

1. 取扱い上(危険防止)の注意

- (1) 検体及び本品の取扱いには、使い捨て手袋、実験着などの保護衣及び保護用眼鏡を着用するなど、人体に直接触れないように注意してください。また、測定終了後はよく手を洗ってください。
- (2) 試薬が誤って目や口に入った場合には、直ちに水でじゅうぶんに洗い流すなどの応急処置を行い、必要があれば医師の手当てなどを受けてください。
- (3) 試薬が誤って皮膚及び粘膜に付着した場合には、直ちに大量の水で洗い流してください。
- (4) 試薬をこぼした場合には水で希釈してから拭き取ってください。
- (5) 検体をこぼした場合は、次亜塩素酸剤(有効塩素濃度 1,000 ppm、0.1%)などの消毒液を使用してじゅうぶんに拭き取ってください。なお、拭き取る際には、ゴム製の手袋などにより手を保護してください。
- (6) 検体及び本品を取り扱う場所では飲食又は喫煙をしないでください。
- (7) 検体又はヒト血液由来成分を含む構成試薬(第 XI 因子欠乏血漿)は HIV、HBV、HCV などのウイルスによる感染の危険性があるものとして取り扱い、検体又は検査に使用した器具類は高圧蒸気滅菌器を用いて 121℃で 20 分以上加熱滅菌処理をするか、次亜塩素酸剤(有効塩素濃度 1,000 ppm、0.1%)に 1 時間以上浸すなどにより消毒してください。これらの作業中は、じゅうぶんに換気を行ってください。

2. 使用上の注意

- (1) 試薬及び消耗品は専用のものを使用し、その容器・付属品などはほかの目的に転用しないでください。
- (2) 試薬は必ず貯蔵方法に従って保存し、凍結させるなど指定の条件以外で保存したものや使用期限を過ぎたものは使用しないでください。
- (3) ロットの異なる試薬又は残った試薬を混ぜ合わせて使用しないでください。
- (4) 試薬カセット内の試薬ボトルの組合せを変えないでください。
- (5) バーコードをぬらしたり、ペンで記入するなどして汚したりしないでください。
- (6) すべての試薬は保存又は反応中に強い光を当てないでください。
- (7) すべての試薬は開封又は分注時に微生物の汚染を避けてください。
- (8) 測定系及び洗浄液の調製には必ず精製水を使用し、水道水は用いないでください。
- (9) 検体は使用前に 18～25℃に戻し、よく混和してください。ただし、激しく振り混ぜたり、泡立てたりしないでください。
- (10) 本品を保存する際は、垂直の状態で保存してください。
- (11) 本品の試薬カセットは再使用できません。

3. 廃棄上の注意

- (1) 測定により生じた廃液については、検体などと同様に滅菌又は消毒の処理を行ってください。また、これらを廃棄する場合には、各都道府県によって定められた規定に従ってください。
- (2) 測定により生じた廃棄物及び使用後の容器を廃棄する場合には、廃棄物に関する規定に従って医療廃棄物又は産業廃棄物など区別して処理してください。
- (3) 廃棄する際は、水質汚濁防止法等に規制に留意して処理してください。
- (4) 検体及び試薬をこぼした場合は、次亜塩素酸剤(有効塩素濃度 1,000 ppm、0.1%)などの消毒液を使用してじゅうぶんに拭き取ってください。なお、拭き取る際には、ゴム製の手袋などにより手を保護してください。
- (5) 本品の残液、使用後の廃液は、各都道府県によって定められた規定に従ってください。

4. その他の注意

本品による測定値は既存製品と高い相関性を示しますが、系統的な誤差を生じる場合がありますので、必要に応じて相関性について検討されることをお勧めします。

【貯蔵方法・有効期間】

1. 貯蔵方法

2～8℃で保存してください。

2. 有効期間

25 ヶ月

使用期限(Exp.)は外箱に記載してあります。

【包装単位】

コバス t システム 第 XI 因子

54 テスト

R2:第 XI 因子欠乏血漿

3×0.58 mL 用

【主要文献】

- 1) Glick MR, Ryder KW, Jackson SA. Graphical Comparisons of Interferences in Clinical Chemistry Instrumentation. Clin Chem 1986;32:470-475.
- 2) Breuer J. Report on the Symposium "Drug effects in Clinical Chemistry Methods". Eur J Clin Chem Clin Biochem 1996;34: 385-386.
- 3) Sonntag O, Scholer A. Drug interference in clinical chemistry: recommendation of drugs and their concentrations to be used in drug interference studies. Ann Clin Biochem 2001;38:376-385.
- 4) CLSI Document EP17-A2. Evaluation of Detection Capability for Clinical Laboratory Measurement Procedures. Vol. 32, No. 8, 2012. Approved standard, 2nd Edition.
- 5) 自社データ

【問い合わせ先】

ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

カスタマーソリューションセンター

〒108-0075 東京都港区港南 1-2-70

フリーダイヤル:0120-600-152

【製造販売業者の氏名又は名称及び住所等】

ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

〒108-0075 東京都港区港南 1-2-70

フリーダイヤル:0120-600-152

コバスは Roche の登録商標です。
その他の全ての製品名及び商標は、各所有者に帰属します。

